

「はうううう！」

「つかさ？へっ？つかさってば！」

「ほ～い、お茶だよ！って、あんたたち、昼間っから何やってるのよ」

「い、いやかがみ、誤解だってば、それよりつかさが壊れた！」

「おねえちゃん...おねえちゃん...おねえちゃん...」

「つかさ、離して！苦しいってば！かがみ、たすけてっ！」

.....

「とりあえず、つかさをベッドに寝かせるから、ほら、こなたは脚を抱えて」
「うん、よいしょっと、女子高生の太ももなんて眼福眼福」
「おやじかお前は！それより状況を考えろ、オイ」

「おねえちゃん...おねえちゃん...はううう...」
「どうしたのよつかさ、私はここにいるわよ、苦しいの？」

「はうううう、おねえちゃん...おねえちゃん...おねえちゃん...」
「うわ言でこれしか言わないわよ、こなた、一体つかさに何をしたの！」
「ふえっ...べ、別に何もしてないヨ」

「つかさの胸に顔をうずめて抱きしめられていたのに『何もしてない』って？」
「そ、それはつかさが急に...でも、本当に変な事はしてないよ」

「納得いかねー！理由をちゃんと訊こうかオイ？
あんたまさかいつもやってる変なゲームみたいなひどい事、つかさにしたんじゃ...」
「そんな事絶対してないヨ、かがみ顔近いし、怖いよ」

「おねえちゃん...つ...おねえちゃん...」

～つかさはまだ夢の世界～

「午前中つかさと映画見に行ったじゃん」
「ああ、デートだったわね、お熱いことで」

「で、子供料金で入る為チケット売り場で、『おねえちゃん、チケット買って』って演技でつかさに言ったんだよ」
「あんたまたそんな事を(コイツは、普段なら身長とか気にするくせに、またこんな時だけ利用しよって)」

「で、それからずっとつかさが嬉しそうでさ、さっきつかさが、もう一回言っというとったから」
「つかさに言ってあげたってワケ？」
「うん」
「でもつかさは、あの有様よ、あんた一体どういう風に言ったのよ」

「ただ言うだけじゃつまらないから、ゲームの妹キャラのノリで...」
「ふーん？」
「こう上目遣いで、つかさ、あ、いまはかがみ相手だから...」

「か・が・み・おねえ・ちゃん ...」

「 / \」

「ムギユ！かがみ！離してってば！苦しい！」

「つ...おねえちゃん...つかさおねえちゃん...むにゃ...ふあああああつ」

「あっ！つかさ！起きたのならたすけてっ！」

「ふにゃ？え、おねえちゃん、こなちゃんは私のだよ...離れてよ」

「つかさ、何気に恥ずかしい台詞禁止！とりあえずかがみをベッドに運んで...」

「かがみおねえちゃん...かがみおねえちゃん...かがみおねえちゃん...」

～ 今度はかがみが夢の世界～

「これがさっきまでのつかさの状態」

「ふええええ、私こなちゃんにそんなことしたの？」

「いやーつかさが気付いてくれなきゃ大変だったよ！

つかさの胸でも苦しかったのに、

かがみのムネじゃほんとに窒息死だヨ...って、あっ！（シマッタ）」

「こなちゃんの、ばかーっ！」

私の失言と同時につかさのリボンが解け落ちた、

ああ、『柊家の掟』再発動か、学習能力の無い自分を悔やんだ。

つかさの機嫌が直るまで...その日一日私は、つかさの妹にされてしまい、

「つかさおねえちゃん」と呼ぶたびに何度も抱きしめられた。

そのたびにかがみにもからかわれたヨ、ええ、しっかりとネ。

『柊家の掟』については、SS [柊家の掟](#) をお読みいただければ嬉しいです

『柊家の掟』シリーズは[1-724氏作者ページ](#)から時系列順にアクセスできます

[作者別保管庫\(1スレ目\)](#)に戻る

イラストは1スレ913レスに、このSSのイメージ画として投稿下さいました **913氏作品** です。

[コメントフォーム](#)

名前:

コメント:

投稿

- 萌え ~ -- やは (2008-05-19 16:32:32)
-
-